

# 董其昌山水画における实景—婉變草堂図を中心に

宮崎 法子

はじめに

董其昌（一五五五—一六三六）が提唱した「仿古」すなわち「古人を師とする」は、文人画理論の規範として、大きな影響力を持つに至った。董其昌以後、文人画家だけでなく、職業画家の作画においても「仿古」形式が用いられるなど、仿古は一世を風靡した。一般に、董其昌の山水芸術を分析考察するとき、この仿古という側面が重視されている。

一方、董其昌は、同時に「造物を師とする」ことも提唱している。

「画家は始め古人を師とし、後に造物を師とする」「画家は古人を以って師となせば、すでにおのずと上乘、これを進めまさに天地を以って師と為すべし。」（「画家始以古人為師、後以造物為師」「画家以古人為師、已自上乘、進此当以天池為師」『容台別集』卷四）。この言からは、仿古よりもかえって天地を師となすことの方を重視していることが伝わる。董其昌の題跋や随筆からは、彼が自然の景勝を観察することに非常に敏感であったことが見て取れる。従って、彼の有名な「万巻の書を読み、万里の道を行く」という言葉は、単なる修辭ではなく、彼の本心から出たものといえるだろう。実際、彼の作品には、具体的な地名を冠したものが多し。实景を描く山水画はもともと、文人画の起源に密接に係わる画

題であった。だが、そのような伝統の上に、董其昌は意識的に、従来とは異なる新たな芸術様式を創造した。従来、一般には、彼の造形上の新奇さは、「古人を以って師と為す」ことを通じて創造されたもので、そこに「天地を以って師と為す」要素を考へることはあまり意味がないと考へられてきた。

では、董其昌がその言説において「仿古」より重視していたと思われる「天地を以って師と為す」とは、一体何であったのか。本論では、董其昌の初期の代表作で、獨創性が殊に際立ち、しかも実在の地を題名に冠した「婉變草堂図」（台湾 個人藏）を中心に、そこで「傲古」と「天地を師と為す」の二つの要素が、どのような関係にあるのか、どのように表わされているのかを具体的に見ていく。それによって、彼の芸術にとって、「以天地為師」とは一体何であったのかについて、考へてみたい。

## 一、松郡九峰、九峰三泖

「婉變草堂図」（個人藏）（図1）は、自題によれば、董其昌が都から官遊で江西へ赴いた後、一時帰郷した万曆丁酉（一五九七）十月に、陳

繼儒（字仲醇、または道醇）（一五五八—一六三六）が小昆山に構えていた読書台を訪れ、別れに際して贈った作品と分かる。主題的には、友人の別業を描き贈る呉派の別号図の流れを汲む作品である。

陳繼儒は、その一年前の万曆一四年（一五八六年）、科挙受験を諦め、ここ小昆山の南麓に読書台を築き隠棲した。一方、董其昌はその後の万曆一七年（一五八九）に三五歳で進士となり官途に就いた。陳繼儒の隠棲の地、小昆山は、西晋に仕えた陸機（二六一—三〇三）・陸雲（二六二—三〇三）兄弟の読書場として知られた場所であった。

東シナ海に堆積した長江デルタの先端に位置する上海一帯は、高山はないが「松郡九峰」と称される九座の低山（鳳凰山、庫公山、辰山…一名神山、佘山、薛山、機山、横雲山、天馬山…一名干山、小昆山）が点在し、平坦なこの地に浮かぶ島々のような景観をなしている。「九峰三泖」とも称され、古来、文人たちが山居した景勝地であった。なかでも、三国呉の名将陸遜（一八三—二四五）の孫、陸機・陸雲兄弟は有名で、小昆山は、呉の滅亡（二八〇年）後、西晋に出仕するまで彼らの読書の間であったといわれている。呉の名門で、西晋に出仕し活躍した後、悲劇的な最期を遂げた陸機・陸雲と、彼らとともに絶えてしまう陸氏一族にちなむ史跡は、小昆山のみならず機山や横雲山など、九峰のそこかしこに伝わっている。それから千年以上後、元末明初の動乱期に、天馬山に隠棲した楊維禎など、多くの文人や画家たちが乱を避けこの地にやってきた。黄公望もその一人であり、「九珠峰翠図」（図4）や「九峰雪霽図」（北京・故宮）など、九峰を題材にしたとされる作品が伝わっている。九峰の山々は、そのように故郷の先賢や文人画家たちにまつわる伝説や史跡が伝わり、それに係わる詩文や絵画が残された地である。ただ、その知名度や文化的な求心力において、蘇州や杭州とは比べ

るべくもないが、この地に、再び光を当てたのが、他ならぬ董其昌や陳繼儒であった。

## 二、王世貞「小昆山読書処記」

陳繼儒が小昆山に読書台を築いた経緯は、王世貞（一五二六—一五九〇）が陳繼儒の依頼によって記した「小昆山読書処記」に詳しい。それによれば、丙戌（一五八六年）の春、徐孟孺（即ち徐益孫、字孟孺、華亭の人、国子監生。陳繼儒、董其昌の友人）と陳繼儒の二人は、小昆山に遊んだ。小昆山は当時、辺鄙な地で舟でも行きにくいところであったようだ（注2下線①）。麓は民家が浸食し、半ばまで登るとやっと佳木や美竹が見られ景色がよくなり、さらに上ると石塔があって、ここからは九峰三泖がすべて手に取るように眺められた。その後、塔の僧とともに下って東に行くと、楚々とした一荘墅に至った。僧の話では、地元の陳姓の建物だが、売りに出されてまだ買手はいないとのこと。たまたま彼らを援助する者がいて、陸機の詩に「髣髴谷水陽、婉孌崑山隱」<sup>3</sup>（彷彿たる谷の流れの南、婉孌たる崑山の陰）と詠ったこの地で二陸を祀ってそこで読書するよう請うた。かくして、二人はそこに読書台を築き、堂や祠堂、花園などを整備した。その景物の一つ一つについて詳述した上で、王世貞は「二子が偶然そこに遊んだことで、真の崑山を得ることになり、崑山は二陸の遺踪を千載の後に得ることになった。…無念に途絶えた二陸の血統を蘇らせ、…彼らを祀る香火を再び見ることができた。これは、文士の大いなる幸である（注2下線④）」という。

その後、徐孟孺は、母を天馬山に葬ったのを機に、眺望のよい鍾賈山に室を建てて移ったため、読書台は陳繼儒一人に帰した。なお、陳繼儒

も、一六〇一年までに、この小昆山に加え、天馬山の南嶺にも草堂を結んでいた。王世貞のもとで趙孟頫の「水村図卷」（北京故宮）を觀た陳繼儒はその跋に、天馬草堂からの眺めを、水村図さながらであると述べている。九峰のうち最も西南に位置するこの小昆山の読書台は、南に他の九峰は望めなためか、眺望の点では必ずしも恵まれていなかったようである。

### 三、小昆山及び横雲山の小赤壁

さて、帰郷して小昆山に陳繼儒を訪れ「婉孌草堂図」を描き贈った董其昌は、その前年、一五九六年の四月に、北京において、燕（北京）と呉（江南）の景を描いた《燕呉八景冊》（上海博物館）を楊繼礼（字彦履）に贈っていた。そのうちの「九峰招隱図」（図2）と「赤壁雲帆図」（図3）は松江の九峰が題材である。

うち、「九峰招隱図」（以下「招隱図」）は、陳繼儒の小昆山の読書台を描いたものである。董其昌は自題で、陳繼儒が九峰深処に三高士の遺志を継ぎ隠居しているという。「九峰深処」というのは、やはり小昆山が九峰のなかでも訪ねにくい場所であったからだろう。そして、帰ったら忘れないで訪ねるようにこの図を描いたと記している。（「陳道醇居九峰深処、統三高之勝隱。彦履帰当訪之、此図所以志也。玄宰」）。

また、「赤壁雲帆図」（以下「赤壁図」）も九峰の一、横雲山の小赤壁を題材にしている。自題に「在横雲山為小赤壁。右《燕呉八景》倣宋人筆意、送楊彦履、歲在丙申（一五九六）夏四月、董玄宰」（横雲山にある小赤壁である。この《燕呉八景》は宋人の筆意に倣い、楊彦履に送る。丙申の夏四月、董玄宰）と記す。なお、董其昌は、この数ヶ月後

に、蘇軾の「赤壁賦」の舞台になった齊安（黃州の古名、現在の湖北省黃岡市）の赤壁を訪れ、そこで、故郷松江の小赤壁が、それに劣らない景であることを知り、後、故郷の小赤壁を称揚した詩を作った。また、別の「小赤壁図」の自題に「齊安に行き赤壁を訪れたが、その高さは数仞に過ぎず、広さも雨亭二つが入るくらいのもだった。吾が郡の赤壁は、その三、四倍はある。（小赤壁の）山靈は不当な扱いを受けているが、それを弁明するものがない」ので「小赤壁図を描いて、その誤りを正す」という。続けて、小昆山にも触れ、「抵鵲村（西王母が住むという崑崙山の山陰にあるという地）が、どれほどの遠さかは知らないが、鑿空して（空を飛んで或いは道を開いて）そこへ行ってみたら、案外、小赤壁と同様、松江の小昆山も、本物の崑山（崑崙山）に遜色ないかもしれない。」と冗談めかして述べる。董其昌の郷土への思いの強さが窺える。

### 四、《燕呉八景冊》中の「九峰招隱図」と「赤壁雲帆図」

《燕呉八景冊》は現在残っている董其昌の紀年作品のうち、最も早期に属す優品の一つで、董其昌自身は、宋人の筆意に倣って描いたと記している（上記、「赤壁図」自題）。ただ、宋代だけではない多様な様式により、各幅大きく異なる画風を見せている。

小昆山を題材にした「招隱図」（図2）は、線描によって、裾野の広い独立した三角形の山の全容を、俯瞰して遠くから捉えている。堂々とした山の手前から右側に水面がぐるりと後方に回り込んでいく構図は、元代における北宋復古様式の山水画の典型的構図である。

また、どっしりとした山の全体を捉えて、山中に山頂が平らなテーブ

ル状の岩峰が配される点などは、黄公望が九峰の天馬山に隠棲していた楊維禎に贈ったとされる「九珠峰翠圖」（国立故宫・台北）（図4）に通ずる。

一方、「赤壁図」（図3）は、構図も筆法も、「招隱図」とは大きく異なっている。画面右端に弧を描くようにオーバーハングする岩壁は、他に類例を見ない形態である。筆者は、小石壁を間近に調査することができず、遠望しただけであったが、近代大規模な採石場となった横雲山は、残念なことに、小赤壁も破壊され、山の姿も旧状を止めていないという情報を現地研究者から教示された。ただ、この作品でその岩肌は、実際の岩壁の凹凸をなぞるように長い線を重ねて描いている。それは伝董源の「寒林重汀図」（黒川古文化研究所）などにも部分的に見られ、広い意味で董源様式に属するものとも言えるが、定型化した皴法とは異なり、初発的な岩肌の描法という印象が強い。この特徴ある構図や描法は、この画冊中では「赤壁図」のみに見られるもので、しかも、それは、翌年の「婉變草堂図」の岩肌の表現との共通性を示している。故郷松郡の「赤壁」を描くために、董其昌が新たに試みた構図であり画法だったように思われる。その数ヶ月後、董其昌は、齊安の赤壁を見て、横雲山の小赤壁がそれに劣らないことを知り、そして翌年、故郷に帰って、赤壁のある横雲山と隣接する小昆山に陳繼儒を訪れ、「婉變草堂図」を描くことになる。

## 五、「婉變草堂図」について

「婉變草堂図」（図1）の婉變は、すでに触れたように、陸機の詩「髣髴水陽、婉變崑山隱」（注3参照）に拠る。当初、陳繼儒が小昆山に

築いた読書台には、婉變草堂という建物はなかった。董其昌が読書台全体を指してこう呼んだと考えられる。或いは、この頃までに、建物の名称も、当初のものとは変わっていたのかもしれない。作品は、縦一一・三cm、横三六・八cmの掛幅で、白く光沢のある上質な紙に、艶やかに発色する墨色が美しい。画中には乾隆帝の題跋が数多く書き込まれている。だが、何よりも、その現実には存在し得ない奇異な景観に目を奪われる。

筆致は、前年の「赤壁図」（図3）に近く、実際の岩肌をなぞるように細く長い線が繰り返されている。「赤壁図」は絹本画であったが、「婉變草堂図」は上質の紙本であり、墨色の濃淡の変化がより効果的である。そのため、素地を塗り残して表現したハイライトによって、丸みを帯びた房状、あるいは筋肉の束のような岩肌の襞の一つ一つがより強調されている。この岩襞の表現は、前年の一五九五年秋に、董其昌が見ていた馮夢禎所蔵の王維「江山雪霽図卷」（京都・小川家蔵）（図5）からの影響も指摘されている。ただ、その滑らかな丸みを帯びた岩の質感は、現在も小昆山中に露呈している赤褐色のなめらかな岩肌（図6-2）や、現状の横雲山の、岩壁にも近い印象があり（図7）、実際のその地の地質や岩肌の感触を、何らかの形で反映しているように感じられる。

## 五（一）「九峰招隱図」と「小赤壁図」から見た「婉變草堂図」

構図を見ると、同じ小昆山を描いた一年前の「九峰招隱図」が、遠くから俯瞰した山容全体を描くのに対して、「婉變草堂図」は山中に入り込んだような距離感で描かれている。

手前には、「招隱図」「赤壁図」と同様、数本の樹木が生えた小さな島



を置き、後方に左右に切り立った崖状の峰を描き、中央が奥へと入り込み、左右二つの部分（峰）に分かれるような構図である。中央奥には、前後関係を無視したような低いなだらかな山が、左の山塊の麓に挿入されている。

右側の崖状の峰は、頂上近くのハート型の白雲が印象的で、その上には直立した髪のように細く丈の長い草が生えている。その麓近くには平らな台があり、そこに見える建物が、読書台の草堂であろうか。左側の山塊からは、不思議な筒状の岩が突出している。右の峰の白雲、そして左の筒状の岩の突起は、特に奇異な印象である。

ただ、よく見ると、「婉嬾草堂図」のこれら左右の二つの峰は、「招隱図」の上部が平らな峰のある山塊のあたりと（図2部分）、「赤壁図」（図3）そのものを左右に配して、一図にしたような構成であることに気づく。先に触れた、奥の方に不自然に挿入されたなだらかな三角形の山は、「招隱図」の右方の山裾にも似た形の遠山がある。さらに「赤壁」の崖下には、もつと似ている低い三角形の小山が、同様に白い素地を輪郭に沿って雲のように残し、山裾に挿入されている。それらは、小昆山から見た天馬山など、九峰の山々を遠望した形である。

さて、このように「婉嬾草堂図」の右側の崖状の峰が「赤壁図」を下敷きにしてしているとすると、この部分は、小昆山の北に間近に望むことができる横雲山の小赤壁を描いたと考えることも不可能ではない。上部に描かれた不思議な形の白雲は、その山名横雲山の連想から、強調して描き込まれたとするのは、強引過ぎるだろうか。

この推論の弱点は、右の崖の下の広い台状の地に建つ建物が、題名となっている婉嬾草堂と考えるのが自然なことで、そうであれば、右の崖を小赤壁とするのは合理的ではない。そこを次に述べる小昆山中の石岩

とみることも可能であろう。しかし、董其昌が、景物の位置関係を忠実に再現することを優先させたとも限らない。实景を踏まえたモチーフを、画面上に構成し直すとき、造形上のバランスや必要から、読書台の位置を変えた可能性も後の董其昌の作画の特徴から見て、皆無とはいえない。よって、一応、ここに右側の雲のある崖を、横雲山の赤壁を重ねた表現という推論を示しておくことにしたい。<sup>10</sup>

#### 五―(二) 王世貞「小昆山読書処記」中の景物と「婉嬾草堂図」

「婉嬾草堂図」の特異な景と関連して、王世貞の「小昆山読書処記」で、注目されるのは、読書台に築かれた湘玉堂に隣接する、二陸祠の後ろに、高さ数十丈もの石岩があるという記述である。石楠花が十本余りこれを覆っており、その石は紫紺色で、赭石と呼ばれたという（注2下線③）。

小昆山は、上から見て数字の8のような形をしており、北と南の二つのなだらかな峰に分かれる。長さ約五〇〇m幅約四〇〇mほどで、高さは五四・3mである（図8 小昆山遊覧図）。北の峰が九峰寺の寺域であり、南の峰の南斜面に、現在、二陸草堂の上方に婉嬾亭が、かなりの高低差で建てられている。その位置は、王世貞の記述（石塔から下り東に行ったところ）<sup>11</sup>とおおよそは符合するように思えるが、現状は「読書処記」の記述から推測されるよりも急な斜面に建っている印象である。

現在の二陸草堂の建物辺りに、そのように高い石岩は見当たらない。あるいは、現在の婉嬾亭の建物が建っている斜面そのものが、その石岩に当たるかもしれないが、確認するすべはない。それは石筍のような独立の石峰なのか、崖のようなものか。「数十丈」（明代の一文≡3・1m）といえば、五〇mあまりの小昆山の標高に迫るもので、文字通りに受け

取れないが、相当に高さのある石岩であったことは確かであろう。現在、そのような石岩を山中に見ることができない。崖ならば、現在の草堂の東側の山の斜面全体が、下の道路まで、灌木や草の間に岩が露呈して、崩落しつつある崖のようになっている(図6-2)。高さ的にはふさわしいが、小昆山の東面の斜面全体を、わざわざ「赭石」とは名付けないであろう。その崖の岩の崩落の様子を見ると、「赭石」も崩れてしまい、現在残っていないと考える方が自然なように思われる(図6-1・2)。

「婉孌草堂図」(図1)では、左側に突き出た白い筒状の奇岩のあたりが、あるいは「読書処記」にいう「赭石」を意識したものかもしれない。この奇妙な岩は、もともとは「九峰招隱図」(図2部分)にも描かれ、その下左側には読書台とおぼしき建物も描かれている。「招隱図」でもこれが「赭石」を表わしている可能性は高い。そもそも上が平らな峰は、黄公望「九珠峰翠図」(図4)にもその先鞭があり、黄公望以後の山水面に散見する。しかし、「婉孌草堂図」では、それが突出し、強いインパクトを与えている。それは、造形上の新奇さを目指すためだけに、空想の産物として、古画のモチーフをデフォルメさせ、ここに描き出したのだろうか。たとえそうであったとしても、その契機になったのは、実際の読書台にあったという王世貞の「読書処記」にいう石岩の存在ではなかったろうか。婉孌草堂を訪れて、董其昌もその石岩は目にしただけである。そのイメージを重ねることで、新しい造形上の冒険が成し遂げられたとしても、矛盾はない。

この部分、王世貞のいう紫がかつた石にしては、白さが目立つが、画中の再題に拠れば、陳繼儒は二ヶ月後に彩色してもらったために、本図を携えて董其昌のもとを訪ねている(注1参照、結局李成や郭熙の絵を見

て彩色の時間がなかったため、そのままになったという)ことから、本来彩色を想定していた可能性も考えられる。

## 結語

以上、「婉孌草堂図」は、前作の「九峰招隱図」と「赤壁雲帆図」から構図の枠組みを引用し、組み合わせ、そこに、山中で目にした景物の実感から得たものを合成する形で、創造的に発展させた作品ではないかという試論を提示した。左右に峰が分かれる様は、南から見たお椀を伏せたような小昆山の外観とは異なるものの、山中に入った者の様々な視点を組み合わせたもので、その意味で実感に基づいていたと考えられる。そして、前年にこの地を描いた自らの作品(図2部分・図3)を組み合わせ、また古画中の要素を使いながら、実際に目にした景物や眺望を、自在に画面のなかに落とし込み、冷静に知的に構成し、従来にない全く新しい造形を創出していったと考えることができる。

官界に入って十年に満たない董其昌が、「九峰深処」の小昆山に隠棲していた旧友陳繼儒を訪れた。彼らはそれぞれのやり方で、故郷の先賢たちへ連なり、その才能を引き継ぐ者としての自負を抱いていたに違いない。

この作品は、もとより実際の景観を伝えるためのものではなく、その地や友人への思いを情緒的に示すものでもない。また、古画の定型に依拠して、それを組み合わせただけの景でもない。実景の要素が、本図中のモチーフをどのように対応するかについては、上述した私見以外の見方も可能だろう。しかし、この作品で、董其昌は、佳紙と、発色のよい墨の対比を十分に意識しながら、自身も愛着のある景物から得た実感を

ふまえて、あたかも、画家自身が、描き出しつつある、見たことのない光景を驚き楽しむかのように、造形していることは確かである。董其昌にとっての「天地を以て師とする」は、以上述べたような形で、この早期の作品にすでに表れていると考えられるのである。

## 注

1 「婉嬾草堂図 丁酉（一五九七）十月、余自江右還、訪仲醇於崑山讀書台。寄此為別。董其昌」また、その歳の冬至の再題があり、陳繼儒がこの作品を携えて訪れて、彩色を施すよう望んだが、そのとき入手していた李成の青緑画「烟巒蕭寺図」と郭熙の「溪山秋霽図卷」を互いに永日賞翫したので、彩色する暇がなかった旨も記されている（是歳長至日、仲醇携過齋頭設色。適得李營丘青綠烟巒蕭寺図及郭河陽谿山秋霽卷。互摺咄咄、影賞永日。其昌記）「以觀李郭画、不復暇設色、米元章云、对唐人皇跡、令人氣奪、良然。玄宰又記。」

2 従来この記は紹介されていないので、以下に標点を付し全文を示す。王世貞「小崑山讀書處記」「崑山為吳屬、邑中有山巋然、以是得號、故老云此馬鞍山也。去華亭之西南十八里、乃真為崑山。今以崑山之為邑、故辱之曰小崑山。是故婁侯陸遜之孫機・雲所讀書處也。然其大實不能當馬鞍之半、而①以地偏而水迂、不為使翰游樂之所便習。②今年丙戌春、友生徐孟孺・陳仲醇游焉。其趾蝕、民居逶迤而上。至半嶺、而有佳木美箭之屬。其勝始露。更上數十武為石塔、而郡之所誇九峰三泖者、悉歸焉。二子樂之、挾塔僧而下、與偕東過、一庄墅楚楚。僧曰是鄉老陳姓之室也、業且售之、無為主者。問其直止可三十金。二子適有某甲饋、欲返其橐而不可、曰士衡不云乎「髣髴谷水陽 婉嬾崑山陰」即此地也、夫誦其詩不知其人可乎。請

售其地、而祠之。置丙舍、以歲時齋讀書其中。太原王辰玉聞、而欣然為助其不給。乃稍稍更飭之。其居前俯清流、左右壘黃石為短垣、其陽獨闕、樹槿藩之、曰槿垣。中有堂三楹、頗整觀斑竹千竿擁之、蒼翠襲几席、曰湘玉堂。側室蕉數本輔之、以長夏弄碧可念、曰蕉室。中奉二陸主、又曰二陸香火處、有石刻曇陽子古篆心經、梓龕居士集度焉。③祠之後左偏石岩高可數十丈、空洞瑰竒、石楠十餘樹覆之、石皆作紫紺色、曰赭石。壑竹後小池蜿蜒至屋角、而盡蘋藻空明、鱸魚出沒、曰蝌斗灣。出槿藩門、則所謂清流者、其淺可以菱、菱熟則紅如夕霞、曰紅菱渡。渡之東、板橋橫焉、左右多垂楊、曰楊柳橋。稍折而東堰水一區、方廣三畝、馴鶴浴之、沒不能蹀、曰洗鶴溪。斑竹之餘勢、上延山椒芟、其繁者得地而亭、曰花麓亭。湘玉堂之陽、與祠之左、為廣場且六畝、二子念欲雜蒔諸花卉實之、而囊裝恥矣。乃自草疏請諸戚執、曰為我塗澤此石者花、為我暎帶此水者花、為我挽客趾者花、為我娛二陸先生之靈者花、即捐花而惠之、百不為多、一不為少、稱意而已。俟花成當目之、曰乞花場。場之右方、有井冽而甘、亦前目之曰澆花井。而屬山人為記、④夫以二子之所偶遊、而得真崑山、以崑山而得二陸之遺踪於千載之後、起哀魄腐骨、而聲施之久絕之、血胤一嘘、而煢然復觀香火。茲非文士厚幸哉。雖然以二陸才、不能保首陽之操、而失身於讐國、又不能沈 幾辨勢、而失身於仇王、晉陽之甲、士衡戎首卒不勝、而以讒死、士龍狡狴差稱循吏、然於大節竟胡當也、二子勉乎哉、即執文一技耳、能使千載之後、若新而況、不但為執文者、又當何如也、於是呼筆紀之、而致花十種於場。」（王世貞『弇州四部稿統編』卷六二、文淵閣四庫全書所収本。標点筆者、以下同じ。）

3 陸機「贈從兄車騎一首」（『李善注文選』卷二四、『六臣注文選』卷二四、文淵閣四庫全書所収本）。婉嬾という語は、陸機の他の詩にも用いられ、ここでは景の美しさを形容する。

4 「孟孺葬母於天馬山、治丙舍依止之、遂舉以歸仲醇、而別築室於鍾買



山、去小崑山五里而邇、其室甚陋而地尤勝、日服除吾將以為鹿門率妻子居之。』(王世貞「書所作乞花場記後」『弇州四部稿統編』卷一六〇、文淵閣四庫全書所収本)。

5 陳繼儒跋云、松雪水村図、仿董巨正與贈周公謹、鵲華秋色卷相類、余既築小崑山讀書臺、復結草堂於天馬山之陽、菰蒲鷓鴣映帶窓口、宛然水村図景也。家有文衡翁摹松雪水村一卷、因出贈王開仲、與此図遂成延津之合。天馬山居、便是真跡、不必復留粉本矣。出門三五步、有田可耕有溪可漁、沿村八九家、入山不深入林不密、此吾天馬山居實際語也。以此図印之然否。万曆辛丑(一六〇一)、讀書弇州園、雨中題陳繼儒。『石渠寶笈』初編卷一四の釈文に基き、跋の図版により一部改めた、)

6 「書大江東詞題尾」余以丙申(一五九六)秋、奉使長沙。浮江歸、道出齊安時、余門下士徐暘華為黃岡令、請余大書東坡此辭、日且勒之赤壁。余乘利風解纜。後作小赤壁詩、為吾松赤壁解嘲。而(+)已)余兩被朝命、皆在黃武間、覽古懷賢、知當日(+)在)坡公旧題詩処也。因書此辭(詞)識之。(文淵閣四庫全書所収本『画禪室隨筆』卷一)なお、国立中央図書館編印 明代芸術家集彙刊『容台集』(四)所収『容台別集』(卷五、4b、台北、一九六八年)の文字の異同を( )内に記す。

7 「画小赤壁并題」吾郡九峰之間、有小赤壁。余頃過齊安至赤壁、其高僅數仞、広容兩亭耳。吾郡赤壁乃三四倍之、山靈負屈、莫為解嘲。昔齊安名人、鹵奔如是。因画赤壁、一正向來之謬。然余以是并疑吾郡有小崑山、未知去抵鶴村路幾許、使余得鑿空游之。或亦如小赤壁、不須多遜也。」四庫全書本『画禪室隨筆』(卷二)。なお、『容台別集』(卷四、8b)には、題「画小赤壁并題」がなく、「齊安名人」を「昔時名人」、「因画赤壁」を「因書赤壁」とする。文意から『画禪室隨筆』を採る。

8 Wen C. Fong, "Tung Chi-ch'ang and Artistic Renewal", in Wai-kan Ho and others ed. *The Century of Tung Chi-ch'ang 1555-1636*, Volume 1, P.46, Seattle and London:

The Nelson-Atkins Museum of Art, The University of Washington Press, 1992.

9 横雲山の名は、陸機の弟陸雲の名に由来し、唐代に横山から改名されたという。文淵閣四庫全書本《至元嘉禾志》卷四、「…本名横山、唐天宝六年易名。与機山相望僅五里許、或云因陸雲名之。…」。

10 さらに言えば、小崑山の中で、現在、北峰の北側に「二陸讀書台」などの、筆者不明の石刻のある摩崖がある。(図8参照)「婉嬾崑山陰」という陸機の詩句から、崑山の北側に史跡として作られたものと思われる。王世貞の記に、それに該当するものは言及されていないため、後の時期のもので、本作品の景物とは無関係と判断した。

11 陳繼儒の讀書台に当初築かれた湘玉堂の南に、六畝の広場があり、そこに友人知人から諸花を譲り受けた「乞花場」という花園を造り、それが其所の一つとなっていた(注2、③と④の間参照)。王世貞はさらに別の花園の為の記も書いている(注4参照)。現在の婉嬾草堂の周囲には、それほど広さの平地はない。現在の小崑山の南門あたりから讀書台に至るなどらかな斜面がそれに当たるのだろうか。このように、王世貞の記述と現状の小崑山の比定は、今後さらなる検討が必要である。

〔付記〕

本論は二〇一九年一月二十一日〜二十四日に、上海博物館で開催された国際シンポジウム「董其昌書画芸術国際研討会」に際して事前に送付した中文予稿の日本語原稿に多少の補足加筆して成ったものである。中文の定稿による論集は今年末に出版予定である。なお、本文中に記した横雲山における近代の採石業や現状に関する情報や資料(上海市松江県地方志編纂委員会編著『松江県志』四一六頁、新華書店、上海、一九九二年)は、シンポジウムの後、松江區博物館副研究員で董其昌書画芸術博物館々々長 楊坤氏から教示されたものである。すでに本稿三校のメ切間際であったためここに付記し謝意を示した。



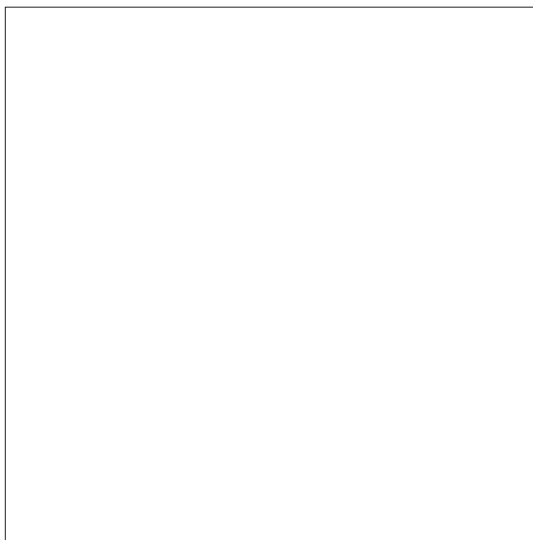


図2 董其昌 九峰招隱図 1596年  
《燕吳八景冊》より 上海博物館

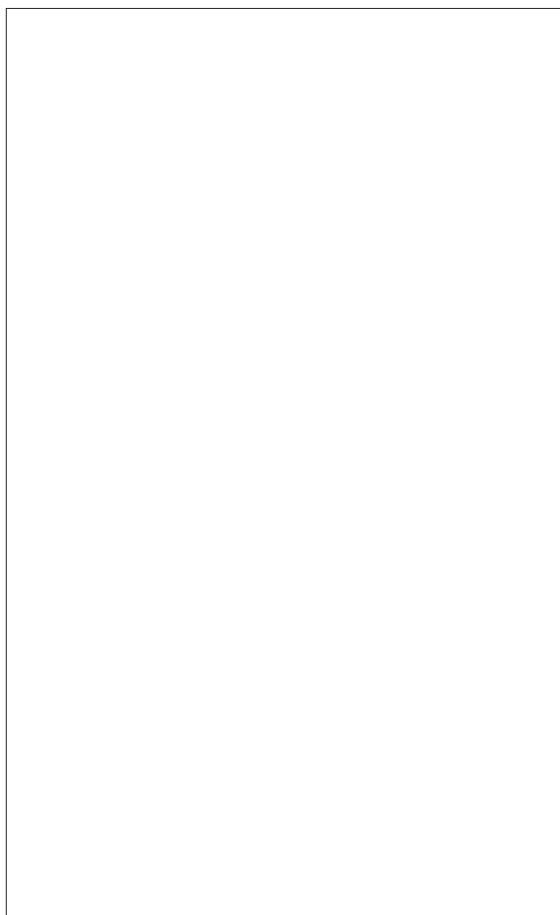


図1 董其昌 婉嬾草堂図 1597年 台湾個人藏

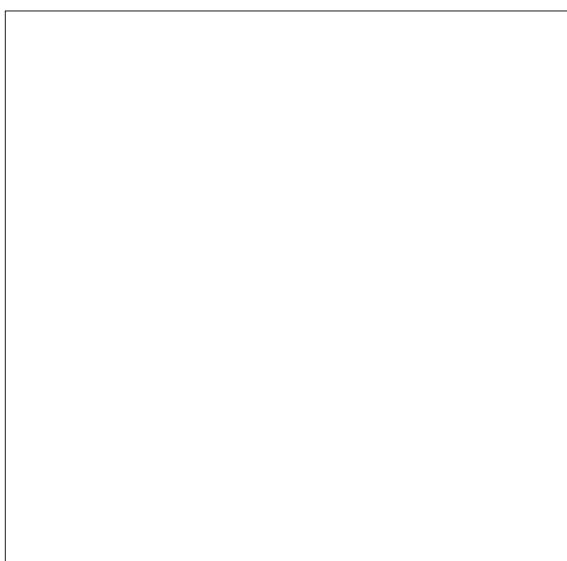


図2 部分（九峰招隱図）

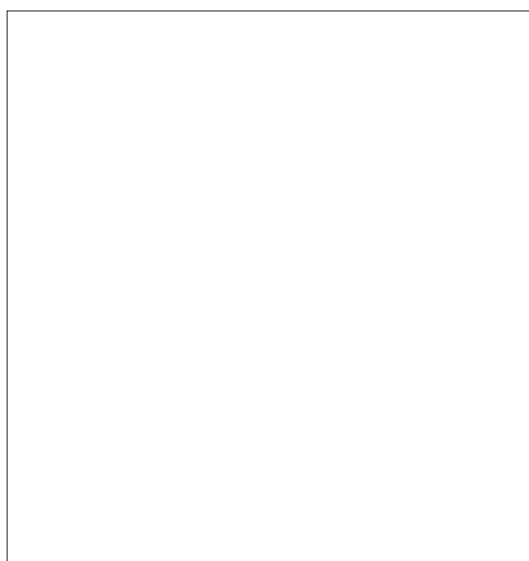


図3 董其昌 赤壁雲帆図 1596年  
《燕吳八景冊》より 上海博物館

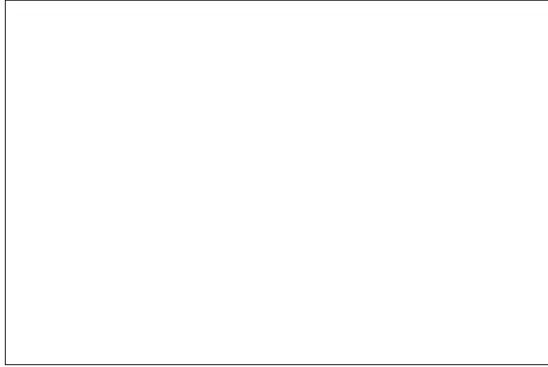


図5 伝王維 江山雪霽図巻 部分 京都 小川家蔵



図4 元 黄公望 九珠峰翠図 國立故宮博物院・台北



図7 横雲山南面 遠望（小昆山から北を望む）  
（図6・7・8とも筆者撮影 2018月9月）



図6—1 小昆山東斜面 遊歩道

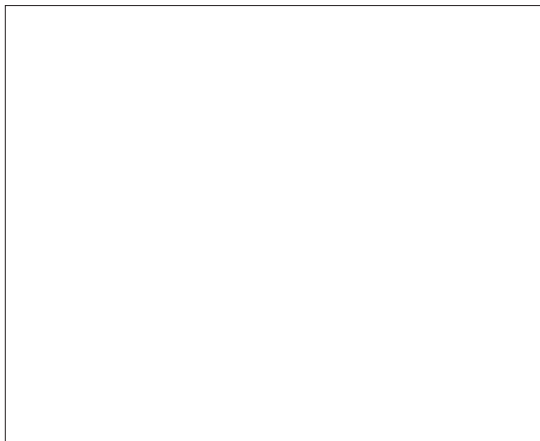


図8 小昆山園遊覧図（現地案内図）

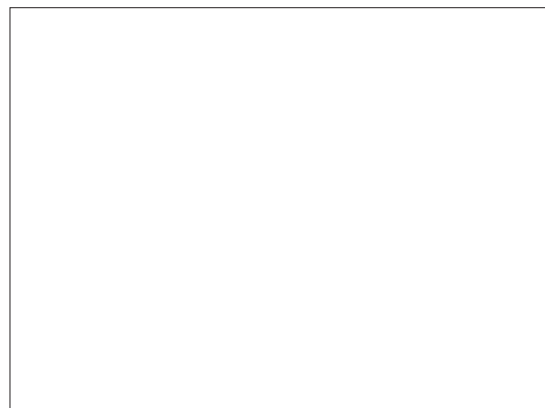


図6—2 小昆山東斜面 中腹から下を望む